



Title	大衆消費財としての毛皮：中国河北・北京（北平）における羔皮（ラムスキン）・寒羊皮の生産・消費
Author(s)	田, 先卉
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 7, p. 51-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91182
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大衆消費財としての毛皮

—中国河北・北京（北平）における羔皮（ラムスキン）・寒羊皮の
生産・消費—

東洋史学 博士前期課程 1 年

田 先卉

はじめに

毛皮の着用は衣食住の中の活動の一つを構成する。18～19 世紀のユーラシアにおける野生動物の毛皮貿易は、ロシアの対外進出とアメリカ植民地の拡大の誘因となった。そして、日々増大する市場需要により、世界規模で資源の過剰消費が発生し、貂・狐・リスなどの野生動物の個体数が激減し、毛皮貿易が衰退していく最も大きな原因となった。とはいえ、毛皮に対する需要が消えたわけではない。

一方、古くから、中国は毛皮の一大消費国であり、毛皮を着用することは社会的地位の象徴だった。王朝政府により、服飾に関する規定が發布されたにもかかわらず、毛皮を着用する風習は上から下に伝わっていった。これら広い階層において着用されたのは必ずしも野生動物の毛皮だけだったわけではない。ところがこれまでの研究では高級野生動物の毛皮にしか重点的な分析が加えられていない。野生動物の毛皮はあくまで朝廷での一部の人間や金持ちだけが買えるものなので、それに比べてより大きな範囲で広がっていた大衆消費財として意味合いが強い毛皮については看過され、この段階の消費文化のあり方は十分には捉えられていない。

そのうえ、従来の研究の中で、中国はあくまで輸入国としての役割を強調されてきた。ところが、清末において、開港場の増加により、対外貿易の拡大に伴い、毛皮貿易に関する構造の変化も見られた。20 世紀初期、天津という主な毛皮輸出港の後背地とする河北・北京地域において、毛皮の加工業は代表的な産業となった。なかでも、河北の辛集（東鹿県）は今でも中国の三大毛皮産業集積地の一つである。

本稿は、これまでの毛皮の研究の缺を補う一環として、19 世紀後半以降の世界での毛皮の供給はどのような形で満たされ、中国の河北・北京地域における毛皮産業はどのように形成されたかなどの問題を検討する。これにより、特に、従来ほとんど分析が行われてこなかった 20 世紀初頭の羊皮市場のありかたを考察したい。

羊皮の流行と市場化

清代の冠服制度では、野生動物の毛皮だけではなく、羊皮もその中の一環として、伝統的な朝廷での服装として規定された。そのうえ、毛皮を着用するという消費のあり方

は朝廷のレベルから下に伝播していく中で、より身近な家畜としての羊皮は比較的入手しやすいため、容易に広範な市場を獲得することとなる。以下、当時の毛皮市場の様子を見ていこう。

中国において、明代の『天工開物』の中では、すでに羊皮が毛皮生地的一种として紹介されている。一方、海外市場、とりわけ北米大陸では、中国との毛皮貿易で取り扱われる商品として、1920年代、ラムスキン・ゴートスキン・ラビットスキンなどの動物皮が史料中に現れる。

なお、17世紀以前の中国では、羊皮の中でも羔皮（ラムスキン）だけは質の良い毛皮としてすでに広く認知されていた。清代になると、細毛皮（質が良い高級毛皮）は、さらに、多くの商品種別に分化していることが窺える。その結果、「珍珠毛（寒羊皮で作られた毛皮）」・「草上霜」などの羊皮の商品名も現れた。

ちなみに、羊皮の流行は、多種多様な商品の分化だけではなく、量的な側面においても顕著な変化を惹起したと思われる。河北では、寒羊という羊の毛皮を用いた製品生産が行われていた。なかでも、1905年の河北束鹿県において、寒羊皮襖の年産量は数万件に達し、県外まで販売された。こうして、元々は朝廷での人間だけが着用できるものが、20世紀初期には、より一般的に大衆の消費に向けて大量に生産された。したがって、羊皮が毛皮生地として、広く認識されたようになったのは、19世紀後半の清末以降のことだと考えられる。

河北・北京における地場産業

以上、毛皮生地としての羊皮の流行と市場化を確認した上で、ここからは河北・北京における毛皮加工産業の具体的あり方を見ていこう。

まず、20世紀初期の束鹿県における羊皮の毛皮加工産業の仕組みは「外県（生皮の調達先）―束鹿県（加工地）―天津（毛皮製品を販売先）」というものであった。束鹿県では、18世紀にはすでに原皮が当地の特産物として扱われ、そのうえ、外県との交易も行われた。20世紀になると、物産として取引されたのは原皮ではなく、毛皮製品の形になったものであった。そのうえ、皮鞣し材料の塩硝もまた商品化され、県外に移出されたことも併せ考えると、束鹿県では、原料皮の調達と皮鞣し材料の供給の両方に比較優位が形成されていた蓋然性が高い。こうして、時間の流れと共に、束鹿県は元々の原料供給地域から毛皮製品加工の重点地域に変わった。そして、ミクロのレベルで束鹿県の毛皮産業は辛集という地点に集中していたことが見られる。ちなみに、現在束鹿という地名は消え、むしろ辛集が当地を名指す名称になっている。毛皮産業の繁栄により、束鹿県の重心が辛集に移動したのである。

毛皮加工を中心にする産業が存在したのは、束鹿県だけではなく、宣化県もまた同様であった。宣化県における毛皮加工産業は羊皮だけを専門におり、粗行（質が比較的粗い毛皮を扱う加工業者の集団）と細行（質が良い高級毛皮を扱う加工業者の集団）に分化し

ていた。宣化県は元来、張家口という原皮の集散地に近接するという立地上の優位性を誇っていた。そのうえ、20 世紀の宣化県において、農業は穀作だけであり、なかでも、毛皮鞣し材料として使用されるキビは当地域の特産品であった。つまり、キビを生産する農業は、宣化県における毛皮のサプライチェーンの中の重要な一環として組み込まれていたのである。興味深いのは、宣化県の毛皮産業に従事する人々はほぼ全員、同じく河北の蔚県出身者であったことである。職人の間には師匠と弟子の関係が結ばれ、それぞれ異なる給与体系と作業内容が慣習的に定められていた。中国において、毛皮職人は差別の対象とはなっていない。むしろこれらの技術を持つ人々の活躍のおかげで、河北・北京地域における毛皮産業が大いに盛行した点の方が喧伝されている。そして、多くの毛皮職人という労働者が束鹿県や宣化県に定着すると、規模の経済性が作用し、地域レベルの集積力を生んでいた。宣化県における毛皮加工産業はある程度複数のものが依存し合い、産業間の密接な連関を促した。そして、小規模な作業場にも 40~50 人が働いていたことも併せ考えると、20 世紀の宣化県において、羊皮を中心にする毛皮産業のみならず、各関連産業も形成されていたことが窺える。

最後に、北京における羊皮加工業に目を転じてみる。「粗」と「細」という分化は、単に商品そのものの分化だけではなく、商品の分化に応じた製造に関わる担い手の分化、さらには産業構造そのものにおける分化にというかたちで現れていた。このようなあり方は前述の宣化県と同様の構造である。細毛皮は高級な毛皮の総称であり、このうち羊皮の種類としては、羔皮と珍珠毛（寒羊皮）が著名であった。産業構造の視点から見ると、細毛皮は粗毛皮より複雑な工程の分化をともなっていた。具体的に言うと、工程の違いにより、皮局（製品製造）を中心に、硝皮局（皮鞣し）と刷皮局（染色やブリーチ）などに合わせて協同作業をするという分業が行われた。具体的な流れは、「原産地—集中地—加工地（皮局—硝皮局…刷皮局—皮局）—販売地—商人（当地商人・外県商人）」であった。1920 年代から 1930 年代にかけて、宣化県の産業構造も概ね同様であった。ただし、北京ではそれぞれの工程は複数の作業場で行われていた。こうした分業化により、生産効率が上がり、より大量生産に適した仕組みへの転換が進んだと考えられる。さらに、ミクロのレベルで、加工地・販売地のようなそれぞれに集中する形だけではなく、「加工地+販売地」という形の集中も見られる。

以上のように、河北は北のモンゴルに近いという地理的な条件があり、このような地理的優位性を活かして、20 世紀の頃では、毛皮加工を主要な産業とする地域は河北・北京に複数分布するようになっていた。さらに、当該産業の発展により、産業集積が形成され、マクロの面において、河北・北京という広い空間の中で、大枠でいえば、束鹿・宣化・北京の三つの地域の周辺に羊の毛皮産業が集中するようになった。

羊皮の流通・消費

河北・北京で加工された羊皮はどのようなあり方で流通・消費されたのだろうか。こ

の問題について、海外消費と国内消費の二つの視点から見ていこう。

20 世紀において、中国製羊皮は海外で高い需要があった。なかでも、最も求められたのは「胎羔皮 (moire lambskin)」であった。元々この種類の毛皮は非常に残酷な方法で作られたため、1932 年に、中華民国側は海外への胎羔皮の輸出を禁止した。その結果、中国は年間 100 万ドルを超える輸出税の収入失うことになることが推計された。ところが当時、寒羊皮などの羊皮を用いて、胎羔皮の模倣品を生産する技術が現れた。当時輸出されていた胎羔皮の大半はこのような「フェイク」であるということを根拠に、天津の毛皮商は抗議の声を上げた。このような毛皮加工技術の進展を背景に、20 世紀初頭の世界的な毛皮の供給不足は中国製羊皮によって補われていったのである。

また、20 世紀初期には、国内市場における羊皮の消費はより程度成熟していた。従前の階層社会における贅沢品としてだけではなく、より「大衆消費財」に近い形で、羔皮・寒羊皮が使われるようになった。その結果、市場の需要に応じて、白色の羔皮をより高級感のある黒色に染める技術も現れ、模造品や偽物のような代替品が数多く出現するに至った。

おわりに

当時、世界中では野生動物の資源が過剰消費され、野生動物の皮を中心とする毛皮貿易が衰退していく、そのなかで、20 世紀初期から、中国製羊皮はその空白を満たし、欧米市場を席捲するようになる。そして、その羊皮を中心とする毛皮加工産業は中国においてもかなり重要な産業として成長しつつあった。河北・北京地域において、産業集積はマクロとミクロの二つのレベルで存在していた。そのうえ、他の産業との産業間連携もあり、当時における地域経済を分析するうえでも重要な問題である。

20 世紀の毛皮加工産業の発展は、現在の毛皮産業の基礎を形作っている。なかでも、辛集（東鹿県）において、毛皮加工産業は百年以上の歴史を誇り、今でも中国で最大の出荷額を維持している。そして、羊皮という家畜の皮でも毛皮の一種として消費市場で流通することによって、一般大衆の毛皮に対する認識にも大きな影響を与えた。より多様な消費財の供給が行われ、消費者に選択の多様性を与え、毛皮産業にも新しいエネルギーを与えた。

本稿において、主な検討対象とした羔皮と寒羊皮は、野生動物の毛皮に比して「大衆消費財」の意味合いを濃厚に帯びるようになっていたものの、羊皮の中では高級な毛皮であるため、中国の消費文化のなかでは、その稀少性から、一定の衒示性は保持していたと思われる。今回は河北・北京地域における毛皮産業の「細」の部分の生産・消費を考察した。毛皮加工という地場産業の実態をより立体的に復元するには、「粗」に対する考察も不可欠だと思われる。この部分については、また今後の課題とする。